

2024/10/06

ルカの福音書 講解メッセージ②⑤

『ルカの福音書 10 章 1-16 節 伝道』

「その後、主は、別に七十人を定め、ご自分が行くつもりすべての町や村へ、ふたりずつ先にお遣わしになった。そして、彼らに言われた。「実りは多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(ルカ 10:1-2)

いよいよ本格的に宣教活動を始めるときに、イエス様は弟子たちを選び、遣わされました。その時、イエス様は「実りは多いが、働き手は少ない。」と言われました。ここでイエス様は、伝道を“収穫”という言葉に置き換えて語っておられます。

重要なのは、この実を実らせたのは私たちではなく、神であるということです。伝道とは収穫であって、実をならすことではありません。ここを正確に理解しておかないと、神の福音の意味を取り違えてしまいます。神が人を救い、救われた人を私たちが収穫するのです。私たちが人を救うわけではありません。神が救った人に御言葉を届けることで、その人は救いの自覚に至ります。あくまでも、救いは神の御業です。

「さあ、行きなさい。いいですか。わたしがあなたがたを遣わすのは、狼の中に小羊を送り出すようなものです。財布も旅行袋も持たず、くつもはかずに行きなさい。だれにも、道であいさつしてはいけません。」(ルカ 10:3-4)

聖書が語る真理とは、「変わらないもの」です。しかし、この世界で言われる真理とは、「移り変わる出来事の中での正しさ」のことです。つまり、神の目から見ると、この世界には真理はありません。この世界は死の世界であり、変化し続ける世界であり、そこには変わらないものは何ひとつ存在しないからです。

この世界は、真理に対して異議を唱えます。その結果、変わらない神の福音を人々に伝え始めると、摩擦が起き、この世から憎まれることもあります。ですから、「狼の中に子羊を送り出す」とは、危険の中に遣わすという意味です。また、「何も持たずに行け」という言葉は、見えるものに頼らず、神を信頼しなさいという意味です。この世界で伝道するということは、迫害と危険が伴います。すると、私たちはつい見えるものに頼りたくなります。「挨拶してはいけない」というのは、人を頼りにするな、という意味です。あくまでも神だけを信頼し、福音を伝えなさい——イエス様は

そのように弟子たちを遣わされたのです。

「どんな家に入っても、まず、『この家に平安があるように』と言いなさい。もしそこに平安の子がいたら、あなたがたの祈った平安は、その人の上にとどまります。だが、もしいないなら、その平安はあなたがたに返って来ます。」
(ルカ 10:5-6)

「平安の子」とは、神が救った人のことです。

そこに神によって救われた人がいるなら、あなたがたが御言葉を語ることで、その人は救いを自覚し、平安を手にすることができます。もしそこに神によって救われた人がいなければ、福音は拒絶され、あなたがたに帰ってきます。

神の言葉を理解するためには、聖書の言葉は聖書で読み解くというのが、ルター以来のプロテスタントの基本です。そのときに気をつけなければならないのは、聖書とはキリストを証しする書であり、キリストを証している実体は新約聖書であるということです。旧約聖書は、新約聖書の影です。つまり、イエス・キリストが語られた言葉こそが“憲法”であり、聖書を解釈するとき最も重要なのは、イエス様が何と言われたのかという点です。イエス様の言葉を通して聖書を読まない限り、さまざまな解釈が生まれてしまいます。

この「平安の子」という言葉も、まさにそうで、それは“救われている子”のことであり、その人たちに福音を伝えれば、救いの自覚に至り、平安がその上にとどまる——とイエス様は言っておられます。この“憲法”に基づいて、イエス様の言葉を最もわかりやすく書き記した弟子がパウロです。

「では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。」(ローマ 10:8)

この中で大切なのは、「神の言葉があなたの心にある」という表現です。それは、神が私たちの心に呼びかけておられ、誰もが神の声を心の中で聞いているということです。

たとえば、私たちは悪いことをしたときに罪責感に苦しみます。自分の心の中に、自分を苦しめる“何か”がいるというのは、本来とても不都合なことです。これこそが「誰もが神の声を聞いている」という証拠なのです。

私たちは潜在意識の中で神の声を聞いており、それに応答することが“信じる”と

いうことであり、“救われた”ということなのですが、潜在意識の領域で起こっているため、本人には「救われた」という自覚がありません。

しかし、聖書の言葉を通して、救われている人はその自覚を持つことができるようになります。聖書の言葉は、預言者やキリストを通して啓示され、今日、聖書という形で残ったもので、これが「口にある」ということです。

「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」

(ローマ 10:9-10)

「救われるからです」とは、救いの自覚に至ることを意味しています。イエス・キリストを主として信じ、口で告白するなら、救いの自覚に至るのです。これらのことが、「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです」と、10節にまとめられています。

「心に信じて」とは、神の呼びかけに応答するということです。ここで“信じる”と訳されているギリシャ語の「ピステイス」は、誠意をもって応答する、誠実な態度を表す言葉です。

そして「義と認められ」とありますが、義とは、神が私たちに対して下される“無罪の宣言”です。それは、神が永遠のいのちを与えたという宣言なのです。義と認められ、無罪とされ、神から永遠のいのちを与えられた者——これが「平安の子」です。

「口で告白して救われる」とあるのは、潜在意識の中で神に応答し、救われた人は、神の言葉を聞き、「信じます」と告白することで、救いの自覚に至るからです。これこそが、私たちが担う伝道なのです。

「しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれているとおりです。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか」とイザヤは言っています。そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」

(ローマ 10:14-17)

私たちがキリストを信じる信仰を持つのは、「キリストについての御言葉を聞くことによる」と教えています。そして、私たちが御言葉を聞き、それを信じることができるのは、すでに神によって救われているからです。この順番を間違えてはなりません。神がまず私たちを救ってくださったからこそ、私たちはイエス・キリストを信じる者とされたのです。

イエス様は、ヨハネの福音書で次のように語られました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて（原文では現在形：聞いていて）、わたしを遣わした方を信じる（原文では現在形：信じている）者は、永遠のいのちを持ち（原文では現在形：持っている）、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っている（原文では現在完了形：すでに移ってしまっ、今もその状態にある）のです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」（ヨハネ 5:24-25）

これが「救いの憲法」です。イエス・キリストを信じている者は、これから救われるのではなく、すでに救われ、死からいのちへと移されているのです。

そして、それは「今」だと、聖書は語ります。死人が神の子の声を聞く時は「今」です。神が語りかけておられるのは、過去でも未来でもなく、いつも「今」です。神との出会いは、常に「今」なのです。

そして、「聞く者は生きる」とは、神の語りかけに応答し、心で信じる者が永遠のいのちを受けて生きる者となる、という意味です。キリストの言葉を聞いて信じることができるようになった人は、永遠のいのちが与えられたからこそ信じることができるのだと、イエス様は語っておられます。救いが先であり、それは神が人を救われたということです。

この真理を知ると、たとえば「家族に福音を伝えられなかったから、救えなかった」と自分を責める必要がないことがわかります。私たちは人を救うことはできません。救うのは神だけです。私たちが福音を語らなかつたことで、家族が救いの自覚に至らなかつたということはあるかもしれませんが、しかし、救われた人が必ず救いの確信を持つとは限りませんし、救われているかどうかは神だけがご存じです。

大切なのは、救いは神の御業であり、私たちはその実を収穫する者にすぎないということです。ですから、救いについて自分を責めるのはやめましょう。私たちの務めは、御言葉を忠実に伝えることです。家族が天国に行けるのだろうか、行けたのだろうか

うかと心配する必要もありません。救われているかどうかは、すべて神の御手の中にあります。人にはわかりません。私たちは「自分がすべきこと」と「神がされること」を正しく区別し、神に委ねて歩むことが大切です。

■神の国は来た

「その家に泊まっていて、出してくれる物を飲み食いしなさい。働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。家から家へと渡り歩いてはいけません。どの町に入っても、あなたがたを受け入れてくれたら、出される物を食べなさい。そして、その町の病人を直し、彼らに、『神の国が、あなたがたに近づいた』と言いなさい。」（ルカ 10:7-9）

ここで「近づいた」と訳されている言葉は、ギリシャ語の エンギゾー で、しかも現在完了形です。現在完了形とは、「近づく」という動作がすでに完了し、その状態が今も続いている、という意味です。つまり、「神の国は近づきつつある」のではなく、「すでに来た」という意味になります。

この訳が重要なのは、神の国が「これから来る」のか、「すでに来た」のかで、私たちの信仰理解が大きく変わるからです。

ヨハネの福音書には、「信じている者は、永遠のいのちを持っている（現在形）」「死からいのちに移っている（現在完了形）」とあります。つまり、私たちは「これから神の国に入る」のではなく、すでに「死からいのちへ移された」者なのです。救いは未来の出来事ではなく、すでに完了した神の御業です。だからイエス様は、「神の国があなたがたに来た」と言いなさい、と弟子たちに命じられたのです。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」（マタイ 12:28）

ここで使われている「来ている」も、ルカ 10 章と同じ「エンギゾー」です。ただし、ここではアオリストという時制が使われており、「過去の一点で起こった出来事」を表します。つまり、「神の国はあなたがたのところに来た」という意味です。そして、その状態が続いているので、ルカ 10 章では現在完了形で「来ている」と表現されているのです。

次の御言葉も、エンギゾーが使われています。

「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて福音を信じなさい。」

(マルコ 1:15)

これはイエス様が最初に宣教の言葉として言われた言葉です。「神の国が近づいた」と訳されていますが、ここもエンギゾーの現在完了形で、完了した状態が続いている状態なので、「神の国が来た」と訳したほうが正確です。

このように、聖書全体を見ても、神の国は「すでに来た」と語られています。100年以上議論されてきたテーマですが、原文に忠実に読むなら、結論は明らかです。

■神の国を拒む者への警告

「しかし、町に入っても、人々があなたがたを受け入れないならば、大通りに出て、こう言いなさい。『私たちは足についたこの町のちりも、あなたがたにぬぐい捨てて行きます。しかし、神の国が近づいたことは承知していなさい。』あなたがたに言うが、その日には、その町よりもソドムのほうがまだ罰が軽いのです。」(ルカ 10:10-12)

ここでも「近づいた」は現在完了形のエンギゾーです。つまり、「神の国が来たことを承知していなさい」と言われているのです。イエス様は、弟子たちに強い調子で、「神の国は来た」とはっきり告げなさい、と命じられました。

ここで興味深いのは、「罰」という言葉が原文にはないという点です。直訳すると、「ソドムの方がまだ耐えやすい」と書かれています。私たちは、罪には罰があると考えがちですが、イエス・キリストにあるのは罰ではなく、憐れみと赦しです。どんな罪でも赦す、これが福音の中心です。

では、なぜ「ソドムの方がまだ耐えやすい」と言われたのでしょうか。ソドムは旧約聖書で火山の噴火のような天変地異によって滅びた町です。つまり、これは、自然災害のような極限の苦しみを指しています。イエス様は、「それよりも、神の国を拒むことの方がはるかに重大だ」と言われたのです。

「その日」とは、肉体の死を指します。神の国を拒む者は、永遠のいのちを持つことができず、土に帰ると聖書は教えています。つまり、滅び、消滅するということです。聖書はそれを「虚無に服す」と言っています。これは非常に重い現実です。だからこそイエス様は、神の国が来たことをはっきり告げなさい、と弟子たちに命じられたのです。

「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちの間に起こった力あるわざが、もしもツロとシドンでなされたのだったら、彼らはとうの昔に荒布をまとい、灰の中にすわって、悔い改めていただろう。しかし、さばきの日には、そのツロとシドンのほうが、まだおまえたちより罰が軽いのだ。」(ルカ 10:13-14)

コラジンとベツサイダは、ガリラヤ湖のほとりにある町で、イエス様が宣教活動がされた場所の一つです。そこでもイエス様は多くの御業を行われました。しかし、それでも神の呼びかけに応答しない人たちがいました。特に、幼いころからイエス様を知っていた人々は、イエス様の言葉を素直に受け入れようとしませんでした。

一方、ツロとシドンは異教徒の町で、他の神々を拝むことが盛んな地域です。しかしイエス様は、「もし同じ御業をツロとシドンで行ったなら、彼らはとうの昔に神に立ち返っていただろう」と言われました。「悔い改める」とは、方向転換して神に立ち返るという意味です。つまり、神の呼びかけに応答しないということが、どれほど重大なことなのかを、イエス様は強調しておられるのです。

「さばきの日」とは、終わりの日のことで、肉体の死を迎える時のことです。その時、神の呼びかけに応答しなかった者よりも、ツロとシドンのほうが「まだ耐えやすい」と言われています。ここでも「罰」という言葉は原文にはありません。使われている言葉は「アネクトス」で、「耐えられる」「耐えやすい」という意味です。つまり、ツロとシドンのほうがまだ耐えやすい、すなわち、この世での苦しみのほうがまだましだという現実が、肉体の死とともに明らかになるということです。

「カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスにまで落とされるのだ。あなたがたに耳を傾ける者は、わたしに耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は、わたしを拒む者です。わたしを拒む者は、わたしを遣わされた方を拒む者です。」(ルカ 10:15-16)

カペナウムとは、神の言葉を聞きながらも、心で応答しない人々を象徴しています。そのような人々は、決して天に上げられることはなく、永遠のいのちを持つこともありません。「ハデス」とはギリシャ語をそのまま音写したもので、意味としては「滅び」「永遠の死」を指します。つまり、神の呼びかけに応答しない者は滅びに至る、ということです。

要するに、イエス様がここで強調しておられるのは、「神が人を救うのであり、その神の呼びかけに応答しない者はどうなるのか」という点です。そして、弟子たちにはその真理を心に刻み、しっかりと御言葉を伝えなさいと命じられました。

イエス様はこう言われます。

「あなたがたに耳を傾ける者は、私に耳を傾ける者であり、あなたがたを拒む者は私を拒む者です。私を拒むのは、私を遣わされた方も拒むのです。」

つまり、神が救われた者に御言葉を語れば、その人は必ずイエス・キリストを信じられるように導かれていきます。しかし、御言葉を拒む者は、語り手を拒むだけでなく、イエス様ご自身を拒み、さらにイエス様を遣わされた父なる神をも拒むのです。ですからイエス様は、「あなたがたを拒む者は私を拒む者です」と言われたのです。御言葉を受け入れない者は、イエス様が語られた言葉そのものを受け入れなかったということになります。つまり、神が呼びかけられたにもかかわらず、その人は応答しなかったということです。

この理解は非常に重要です。ここでイエス様は、罪とは何かを明らかにしておられるのです。

■罪とは何か

「たとい、人の子をそしることばを使う者があっても、赦されます。しかし、聖霊をけがす者は赦されません。」（ルカ 12:10）

イエス様は、「どんな罪でも赦される」とはつきり語られました。しかし、ただ一つだけ赦されない罪があると教えられました。

それが、聖霊を汚す罪です。聖霊を汚すとは何でしょうか。それは、神の呼びかけを拒むことです。神が救いへと招いておられるのに、その招きを拒否し、信じようとしないことだけが、赦されない罪なのです。

私たちの世界では、悪いことをすること、人に迷惑をかけることが「罪」だと考えられます。しかし、神の目から見ると、それらは赦される罪です。神が最も問題とされる罪は、神の呼びかけに応答しないことなのです。なぜなら、神の救いを拒むことは、永遠のいのちを拒むことだからです。

イエス様はこの真理を、ヨハネの福音書でも明確に語られました。

「その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと」

（ヨハネ 16:8-9 新共同訳）

イエス様は、罪とは「神を信じないこと」「神の呼びかけに応答しないこと」だと教えておられます。私たちはしばしば罪を誤解していますが、イエス様はその誤りを正しておられるのです。

神の呼びかけに応答した人たちは大勢います。だからこそイエス様は、「平安の子が多くいる」と言われ、弟子たちに御言葉を伝えて収穫しなさいと命じられました。つまり、救いは神が行われるのです。

私たちは誰が救われているか分かりません。しかし、救われている人は、御言葉を聞くと心の中に葛藤が始まります。すぐに「信じます」と言う人はまれで、多くの場合、御言葉を聞くたびに心が揺さぶられ、葛藤し、逃げられなくなっていくます。やがて御言葉に責められ、心が砕かれ、「イエス様を信じます」と告白できるようになります。その告白を通して救いの自覚に立ち、バプテスマへと導かれていくのです。

神は今も人の心に働きかけ、救いへと招いておられます。幼い子どもであっても、重い障がいを持つ方であっても、神は直接呼びかけておられます。そして、その呼びかけに応答して救われている人たちは大勢います。私たちには誰が救われているか分かりません。だからこそ、私たちは御言葉を語り続けるのです。

人を救うのは神であり、その救いを拒むことが罪である、これこそが、今日イエス様が最も強調しておられる重要なポイントです。